

## 結核

毎年4月には、病院に多くの新人看護師が入職してくる。放射線管理の講義の中で、X線撮影による集団検診の一例として結核について話し、医療知識や看護技術とは別に“結核”についての印象を聞くと、作家の堀辰雄や画家・詩人の竹久夢二が入院したサナトリウムや、女工哀史や野麦峠が話題になった。

### ●野麦峠（長野県）

明治・大正・昭和に掛けて国の経済を支え、わが国の貿易輸出の華といわれた生糸産業は、製糸場で糸ひきをする娘たちに支えられていた。「あゝ野麦峠」は山本茂実（1917～98年）が1969年に発表したノンフィクション文学である。標高1,627mの野麦峠を越えて行った工女たちが働く場所は過酷なものだった。親と雇い主の間で交わされた証文を盾に、1日16時間も働くことを強いられ、病死、自殺に追いやられた工女も少なくなかったと言われている。岐阜県吉城郡河合村角川で生まれた“政井みね”も口減らしのために1903（明治36）年に出稼ぎに出た。その後、“みね”は肺結核で倒れた。

病気の工女は使いものにならず、“ミネビヨウキスグヒキトレ”と電報を受けた兄の辰次郎は、夜を徹して製糸工場がある岡谷に駆けつけた。そして、辰次郎は物置小屋に放り出されて衰弱しきった“みね”を背板に乗せ、工場の裏門から出た。幾日も兄の背にうずくまって峠の茶屋に辿り着いた“みね”の前に、涙で霞む故郷が広がっていた。「あゝ、飛騨が見える、飛騨が見える」とつぶやくように言ったきり、その場に力なく崩れた。時に、1909（明治42）年11月20日、享年22歳のこととある（写真1）。

### ●旧 富士見高原療養所資料館（長野県）

富士見高原療養所は、1926（大正15）年に開所した。その後、結核の長期療養のためのサナトリウムとして知られるようになり、横溝正史（1902～81年）・堀辰雄（1904～53年）・竹久夢二（1884～1934年）など多くの作家や著名人たちが療養した。



写真1 野麦峠にある“あゝ飛騨が見える”像



写真2 旧 富士見高原療養所資料館内の廊下

現在は近代的な総合病院だが、敷地内に創立当時の“富士見高原療養所本館・富士病棟”が現存している。資料館として公開され、第1室は、初代所長・正木俊二（ふじよきやう不如丘）愛用の品々と入所台帳が保存されている（写真2）。第2室では、当時の病室を再現した各病棟配置ジオラマと写真、第3室には当時の病室と院内で撮影された映画の関連資料などを展示している。第4室は、入所していた堀辰雄らの文学者関連の展示があり、第5室では、明治から現在までの“結核の歴史と現況”がパネル展示されている。明治時代から昭和30年代までの長い間、“国民病”と恐れられた結核の死亡率も、現在では往時の100分の1以下にまで激減したが、今も無視できる状況ではない。明治時代から現在まで、結核の現況を分かりやすく展示している資料館は類を見ない。

〔日本放射線技師会 諸澄邦彦〕